

2017
おもろ
チャレンジ

ヒマラヤオオミツバチをめぐる人類学的考察： ネパールグルン族の採蜜活動の変容に着目して

人間・環境学研究科 博士後期課程 2年

合原 織部

ネパール

2018年2月2日-

2018年2月22日



渡航概要と内容

渡航の目的は、ネパールのグルン族のあいだで生業として営まれてきたヒマラヤオオミツバチの蜜の採集に、近年の観光化が及ぼす影響を解明することにあつた。カタルジュン村を対象に、①蜂蜜採集の観光化の実態②それがハチの生息にもたらす影響③従来のグルン族の採蜜活動や蜜の消費のあり方にいかに影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。

調査を始める前に、観光は2月も行われることを確認したが、現地に着くと、冬は観光客が少なくカタルジュン村に採蜜に来る外国人も今年は少ないことが判明した。また、地元のハンターも、蜂蜜の採集量が近年減ってきていることを懸念し、採蜜活動を控え、そのかわりに異なるハチ種による養蜜を行っている状況にあつた。そこで、村のハンターや住人を対象に、聞き取り調査から採蜜の観光化が及ぼす影響を探ることにした。

渡航中に文化の違いから苦労したことは、以上の経験からもわかるように、現場の状況や調査内容に関して事前に予測し予定を立てることが難しく、調査がこちらの思い通りに進まないこともあるということだった。時期によって観光客の数が異なること、また採蜜活動もハチや蜜の採集量などのコンディションによって行われたり行われなかったりする年があることがわかった。また、村へのアクセスの面でも困難に直面した。村は、バスを利用し徒歩で5時間以上かかる場所にある。私は女性ひとりで村に入ることもあり、グルン人のガイドを雇うことを勧められた。それにかかる費用を事前に交渉したにもかかわらず、最終的にはガイド代や交通費をより多く支払わされた（騙された）。そのために、村での滞在でかかるであろうと予測して持参した現地通貨を現地で使い果たし、調査を終えて帰る際、最寄りの町であるポカラに戻ってくるバス代だけは残っていて命拾いをする経験をした。この経験からは、現地の人々の言っていることや情報を鵜呑みにせず、よいガイドを見極めることが重要であることがわかった。



調査地の村の子どもたち



ポカラの町で土産物として売られる蜂蜜

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

この度の調査を通じて明らかになったことは、観光化が地域の生態系や従来のグルン族の採蜜活動の及ぼしている影響はやはり大きいということであった。住人への聞き取り調査を行った結果、村のハンター5人全員が近年のハチの巣や蜜の採集量の減少を指摘している。従来、ハンターは、蜜を採集する際に、その年にどれほどの量の巣や蜂蜜をとるのかを考えながら採蜜を行うという。なぜなら、蜜を採集しすぎることはハチの巣を壊しすぎることになるため、その年以降に蜂蜜がとれなくなってしまう可能性があるからだという。そのことは、ハチの生息にも影響を及ぼすという。第一に、現地の人々が心配するのは、蜜や巣の採集量の変化であることがわかった。

また、村での蜜の利用法にも影響があることがわかった。従来、村の人々は、蜂蜜を嗜好品や薬として、そのまま食することはもちろん、料理に混ぜたり、お湯や酒に混ぜたりして使用してきた。しかし、グルン族の採集する蜂蜜は、ハチが集める植物の蜜の影響で、量を多く摂取することで幻覚作用を引き起こすことがメディアで取り上げられ、独特の効用があることに着目されて以降、海外からの観光客が増え土産物としての蜂蜜販売が盛んになっていったという。それ以降、村で消費される蜂蜜量は減っていることに加え、土産物としての蜂蜜の販売も彼らの生活を安定させるほどの収入にはつなげていないのが現状であることがわかった。

また、ハチの生息数の減少が植物相にも影響していることが明らかになった。それは、農作物の収穫や、高山植物、また村のシャーマンが利用する薬草にも影響していることがわかった。



調査地の村の様子



村付近にある蜂蜜のハンティングサイト

今回の渡航で学んだことは、蜂蜜を食することは、栄養の側面のみならず、お酒に混ぜて飲むなど、人々が集まり楽しむ場を提供するものであることがわかった。グルン族にとっての採蜜文化は、ハンターによる採蜜活動のみならず、村人にとっても重要であることがわかった。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

この度の調査は3週間と短期間であったため、調査ができる内容に限りがあった。しかし、聞き取り調査を通じて、観光化が及ぼすグルン族の採蜜活動、蜂蜜利用、地域の植物相への影響を確認できた。今後は、今回の調査でできなかった採蜜の観光そのものの参与観察と、採蜜活動の観察を行うことが課題である。また、観光化が植物相に及ぼす影響も確認することができたが、さらに調査を続けて、それらの詳細を明らかにする必要がある。今後、この経験を活かすために行いたいと思っていることは、今後もこの地域での調査を続けて、ヒマラヤオオミツバチに着目しつつ、それをとりまく地域の間人や観光客、観光を組織する者、また、自然環境の今日的あり方が複雑に交錯する様を、複数種の関わりから考察し論文を執筆したいと考えている。そのことによって、今日のヒマラヤをとりまく自然環境の課題を、ハチという視点から明らかにすることが可能であると考えられる。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

今後、本プログラムに参加することを希望する学生へのアドバイスは、この企画は、大学で各自が専門として進めている研究とはまったく異なるプロジェクトでも挑戦することを応援してくれるものであるため、海外で挑戦してみたいことを思い切ってやってみてほしいということである。海外、とくに「発展途上国」での調査は、こちらが予測、予定している調査内容がそのままスムーズに進むとは限らず、時間がかかり効率が悪く焦ることもあると思うが、本プログラムに参加することで資金の面でも、精神的な面でも大きなサポートになると思うので、そのような挑戦に挑んでほしい。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*滞在費・食費

*ガイド代

*海外旅行保険 など